# 平和への思い（ウムイ）

令和6年度

「平和への思い（ウムイ）」

発信・交流・継承事業

報告書

沖縄県

## 1 目的

およそ 80 年前、沖縄県民は壮絶な沖縄戦を体験し多くの尊い命が失われた。当時の悲惨な実状を知る体験者の方々は高齢化し、彼らの記憶の継承が困難になりつつある現在において、同じ悲劇を二度と繰り返さないために若い世代の平和を愛する心を育むことの重要性が高まっている。

本事業は沖縄と同様に悲惨な戦争体験などを有し、体験の継承と平和構築に取り組んでいるアジア諸国と日本の学生が共に学び相互理解を深めることを目的としている。また、平和について考える機会を提供し、各地域の平和教育および平和活動に資するとともに、本事業で培った絆が平和構築のためのネットワークの形成や平和のために活動する人材の育成につながること、そして事業成果が平和教育などに継続的に活用されることを目的としている。

この事業目的達成のため、以下の 3 つの目標を設定した。

- 各地域で発生した戦争や事件について学ぶことで、多様な視点から平和について考える機会を提供し、参加者間の相互理解の促進と各地域の平和教育・平和活動に資する。
- 参加者間の絆を育むことで、人的ネットワークの形成と平和に資する人材の育成に寄与する。
- 事業成果を平和教育等で活用できるようにする。

## 2 実施主体

主　　管　　沖縄県平和祈念資料館
受託事業者　　特定非営利活動法人 沖縄平和協力センター

## 3 事業内容

「『平和への思い（ウムイ）』発信・交流・継承事業」は、令和元年度に開始され、今年度で 6 年目を迎える沖縄県の人材育成事業である。本事業は、沖縄と同様に悲惨な戦争体験などを有し、体験の継承と平和構築に取り組むアジア諸国の学生が学びつつ相互理解を深め、平和について考える機会を提供する。

令和元年度は、カンボジア、韓国、台湾、ベトナム、沖縄の 5 地域からの参加者が沖縄県内にて共同学習を行い、各地域が経験した悲惨な戦争や事件、継承についての意見を交わした。令和 2 年度には広島、長崎の 2 地域が新たに加わったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため沖縄県内への参集は叶わず、カンボジアは感染症の影響で事業への参加自体を取りやめた。それでも 6 地域をオンラインで結び「オンライン共同学習」を実施し、平和への思いを繋いだ。

令和 3 年度および 4 年度は、海外の参加者はオンラインでの参加、広島、長崎、沖縄の参加者は感染防止対策を十分に講じ、沖縄県内での対面参加というハイブリッド形式にて実施した。

令和 5 年度、そして今年度は 7 地域からの参加者および指導者らが全員沖縄に参集し、県内各地の視察やディスカッションなどを通じた共同学習を実施した。

## 4 事業期間

事前学習／ 2024 年 10 月 26 日（オンラインにて実施、詳細は 15 ページ）
共同学習／ 2024 年 11 月 18 日～ 23 日（沖縄県内にて実施、詳細は 18 ページ以降）

## 5 実施体制

### 事業責任者

沖縄県平和祈念資料館　主　査　棚原和宏
沖縄平和協力センター　理事長　仲泊和枝

### 沖縄平和協力センター

理事長　仲泊和枝（事業総括）
事務局長　樋口洋平
研究員　仲本和
研究員　金城愛乃

### 沖縄県平和祈念資料館

学芸班長　中山晋
主　査　棚原和宏

### （株）国際旅行社

事業部次長　諸見里一壽
企画事業部主任　上地翔太

### （株）okicom

映像音響技術責任者　武田誠
映像撮影責任者　高良史朗
配信管理責任者　宮城光司
映像管理担当　座波毅
音響技術担当　藤村一豊
配信管理担当　新垣ステファニー美香

### 実施団体の人員配置

**総括責任者 / 事業総括・運営：仲泊 和枝（沖縄平和協力センター 理事長）**
令和元年度、2 年度、5 年度において本事業総括責任者を担当。令和 3 年度には総括補佐として従事。修学旅行生や外国人研修生等を対象に沖縄戦や戦後復興に関する講話を提供した実績を多数有する。

**総括補佐・共同学習運営担当：樋口 洋平（沖縄平和協力センター 事務局長）**
令和元年度および 2 年度の本事業において事業運営補佐・オンライン共同学習の実施を担当。令和 3 年度の事業では総括責任者として事業運営に従事。

**共同学習運営・沖縄チーム指導担当：仲本 和（沖縄平和協力センター 客員研究員）**
令和 3 年度事業の参加者。本年度は主に沖縄チームの指導を担当。大学在学中より県内外の中高生・大学生に向けて平和学習を実施し、2022 年までに 100 回程度の講義を提供した。最近では早稲田大学、東京大学にて講義を提供、2022 年においては沖縄県主催復帰 50 周年記念シンポジウム「若者と考える米軍基地と沖縄の未来」に登壇した。

**共同学習運営・広報担当：金城 愛乃（沖縄平和協力センター 研究員）**
令和 2 年度から 5 年度の本事業において、共同学習運営、動画制作、広報、オンライン配信補佐を担当。

# 6 参加地域における事業実施

## 参加者選考

**〈参加者の選考および資格要件〉**

参加者については各地域から 5 名を選考することとし、参加資格要件は以下の通りである。

- 原則として各募集国・地域に在住する大学生であること。
- 事業の主旨を理解し、将来自国での平和教育・平和活動に携わる意思のある者で、事業参加国の若者と連携して平和発信に寄与する意思のある者であること。
- 事前学習と沖縄での共同学習に原則全日程参加できること。

**〈参加国・地域における学生の応募、選考、窓口機関への委託〉**

沖縄以外の地域における窓口機関について、本事業の趣旨・目的を十分に理解しているという観点から主に令和 5 年度に募集窓口を担った機関へ再依頼した。沖縄県内においては、実施団体が窓口業務を担い、県内の各大学への周知を行ったうえで参加者を公募した。また、各窓口機関には、参加学生がオンライン事前学習で発表する資料作成の指導と、沖縄県内での共同学習時に帯同・監督する指導者の配置も併せて依頼した。窓口機関一覧は以下の通りである。

| 地　域 | 募集・窓口期間 | 学習テーマ |
|---|---|---|
| 沖　縄　県 | 実施団体（沖縄平和協力センター） | 沖縄戦 |
| 広　島　県 | まなび工房 | 広島県における原爆投下 |
| 長　崎　県 | 公益財団法人 長崎平和推進協会 | 長崎県における原爆投下 |
| カンボジア | 国立トゥール・スレン虐殺博物館<br>（大学と協力） | カンボジア大虐殺（ポル・ポト政権下の大虐殺） |
| 韓　　国 | 国立済州大学校 | 済州島 4.3 事件 |
| 台　　湾 | 国立政治大学 | 2.28 事件 |
| ベ ト ナ ム | ホーチミン市師範大学 | ベトナム戦争 |

## 7 共同学習日程

2024年11月18日～23日（移動日含まず）

| 日　付 | 時　間 | 内　容 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 11月18日（月） | 9：30～10：30 | オリエンテーション | 沖縄平和協力センター（以下 OPAC） |
| | 10：30～10：45 | 開会式 | OPAC |
| | 10：45～11：20 | 自己紹介 | |
| | 11：20～12：10 | チームビルディング・ワークショップ 前半 | 上杉勇司（早稲田大学 教授） |
| | 12：10～13：00 | 昼食 | |
| | 13：00～17：00 | チームビルディング・ワークショップ 後半 | 上杉勇司（早稲田大学 教授） |
| | 17：00～18：00 | 振り返り | OPAC |
| 11月19日（火） | 09：30～10：30 | 各地域によるプレゼン発表 前半 | |
| | 10：30～10：40 | 休憩 | |
| | 10：40～12：00 | 各地域によるプレゼン発表 後半 | |
| | 12：00～13：00 | 昼食 | |
| | 13：00～14：30 | 講義：沖縄県平和祈念資料館 | 大城航 ( 沖縄県平和祈念資料館職員兼沖縄チーム指導者) |
| | 14：45～16：15 | 視察：沖縄県平和祈念資料館、平和の礎 | |
| | 16：30～17：00 | 振り返り | OPAC |
| 11月20日（水） | 09：30～11：00 | 視察：首里城公園 | 那覇市街角ガイド |
| | 11：00～11：20 | 視察：第 32 軍司令部壕跡 | OPAC |
| | 11：50～12：40 | 昼食 | |
| | 13：00～14：15 | 視察：佐喜眞美術館 | |
| | 15：00～16：30 | アーティストとのトークセッション | ユウ（アルカシルカ） |
| | 16：30～17：00 | 振り返り | OPAC |
| | ― | コザにて一泊 | |
| 11月21日（木） | 09：30～11：20 | 視察：沖縄市コザ街歩き | 沖縄市観光物産振興協会 |
| | 12：15～12：55 | 昼食 | |
| | 13：15～15：00 | 講義：沖縄の基地問題と安全保障 | 野添文彬（沖縄国際大学 教授） |
| | 15：00～15：15 | 休憩 | |
| | 15：15～17：00 | プログラム OBOG とのオンライン交流 | OPAC、okicom |
| | 17：00～17：30 | 振り返り | |
| 11月22日（金） | 10：00～12：00 | ディスカッション | 新垣誠（沖縄キリスト教学院大学 教授） |
| | 12：00～13：30 | 昼食（各自） | |
| | 13：30～17：00 | シンポジウムの準備 | |
| 11月23日（土） | 11：30～12：30 | リハーサル | |
| | 13：00～13：30 | 昼食（弁当） | |
| | 13：30 | シンポジウム開場 | |
| | 14：00～16：30 | 各地域の発表、パネルディスカッション | OPAC、okicom、末吉未空（司会）、新垣誠（沖縄キリスト教学院大学 教授） |
| | 16：30～17：30 | シンポジウム終了、閉会式 | |
| | 18：30～20：00 | 閉会パーティー | OPAC |

移動時間・待機時間等は除く

# 2 事前学習

## オンライン事前学習

沖縄での共同学習に先立ち、参加者同士の顔合わせと各地域の文化や慣習等の理解促進を目的とした事前学習を実施した。

７地域の顔合わせ

広島チーム

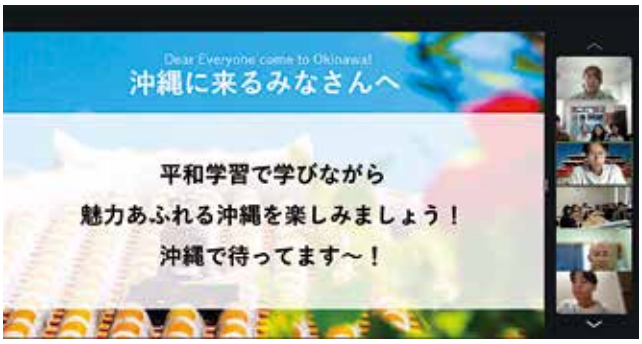
台湾チーム

ベトナムチーム

長崎チーム

韓国チーム

カンボジアチーム




沖縄チーム

# 1 共同学習

## 共同学習概要

本事業の参加者は、沖縄に参集し６日間の共同学習を行った（移動日除く）。海外からの参加チームには、日本語に堪能な指導者もしくは通訳担当が帯同し、語学面で参加者の理解促進に向けたサポート役を担った。

| | |
|---|---|
| 11/18（月） | 開会式、オリエンテーション、チームビルディング・ワークショップ |
| 11/19（火） | 各地域の学習テーマに関するプレゼンテーション、沖縄県平和祈念資料館に関する講義、沖縄県平和祈念資料館・平和の礎の視察 |
| 11/20（水） | 首里城公園、第 32 軍司令部壕跡、佐喜眞美術館の視察、アーティストとのトークセッション |
| 11/21（木） | コザゲート通り近辺の散策、沖縄の基地問題と安全保障に関する特別講義、過去の事業参加者との交流 |
| 11/22（金） | ディスカッション |
| 11/23（土） | 成果報告会「シンポジウム あしたのアジア」、閉会式 |

## 成果報告会　「シンポジウム あしたのアジア」

共同学習最終日に、事業の成果報告会としてシンポジウムを開催した。参加者たちは沖縄県内の来場者に対し、各地域の学習テーマに関する考察や、本事業を通じての学びなどを発表した。

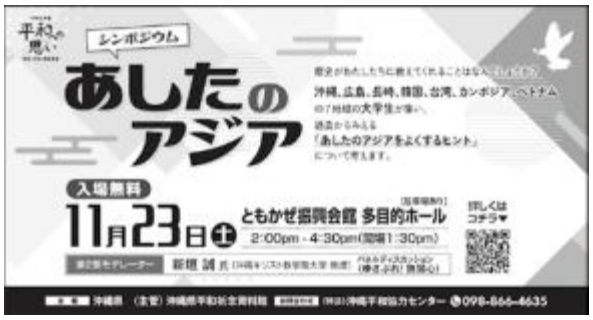
本事業およびシンポジウム周知のため、紙面・ウェブ上での広告掲載、事業特設サイトの開設、県内イベントサイトへの情報掲載、ラジオ番組への出演など、幅広い情報媒体を活用した広報活動を実施した。

チラシ兼ポスター

特設サイト

ウェブ広告

新聞広告



## 2 成果報告会「シンポジウム あしたのアジア」

沖縄での共同学習最終日にシンポジウムが実施され、参加者は事業を通じての学びを発表した。

〈シンポジウム あしたのアジア〉
日時　令和 6 年 11 月 23 日（土）2:00 pm - 4:30 pm
会場　ともかぜ振興会館 多目的ホール
概要　【第 1 部】各地域の戦争・事件等に関するプレゼンテーション
　　【第 2 部】パネルディスカッション「揺さぶれ！無関心 ～興味の力～」

### 第 1 部　プレゼンテーション

#### 広島チーム

**広島県における原爆投下**

広島の原爆投下は、被爆者認定や放射線被害、記憶の継承など、今でも多くの課題を残している。被爆者は法律で 4 つに区分されているが、「黒い雨」を浴びたものの未認定の人々が存在し、裁判で認定を求めている。この黒い雨の降下地域を特定する研究が進んでいるが、まだ正確にはわかっていない。被爆体験については、体験者の高齢化が深刻であるため広島市が体験の伝承者を養成し、2023 年時点で 195 人が活動している。しかし、非体験者によってどこまで継承できるかという課題もある。そのほかにも、被爆の象徴である広島市内の被爆樹木の保護資金や行政の関与など、広島から平和を発信する上で直面している課題がある。

**事業で学んだこと**

事業を通して、無関心という状態がどのように発生するのかについてチームで議論した。その結果、現状に満足できる状況にある人とそうでない人との間には満足感におけるギャップが存在し、それゆえに互いに共感を抱けず無関心という態度に繋がるのではないかと考えた。このことから、平和に関心を持つために必要なのは、深掘りをするきっかけ作りをすることだと考える。私たちがこれまで平和について関心を持てたのは、自身の興味関心などをもとに、探究心を持っていろいろな物語に触れたからではないか。人によってそれぞれ好きなものは違うかもしれないが、それぞれが深掘りしていけばどこかで一つの物語に繋がり、その行き着く先が平和の一つの形にもなるのではないか。

## 台湾チーム

**2.28 事件**

2.28 事件は、当時の中華民国政府警察と台湾人市民との衝突を契機に台湾社会全体へ広がった事件であり、当時の社会情勢と政府への不満が引き金になったものである。現在、移行期正義を通じて被害者への賠償や加害者の法的追及が進められている。この事件について、チーム独自の匿名調査を行い 107 名から回答を得た。その結果、事件の認知度は高く、半数以上が記念施設を訪問した経験があった。一方で、移行期正義の妥当性については「わからない」との回答が全体の 5 割以上を占め、この傾向はすべての年齢層で共通していた。

**事業で学んだこと**

この 1 週間で歴史、行動、交流、発信の重要性について深く学んだ。歴史を理解することで、各地域の社会形成の過程や、沖縄戦や米軍基地の歴史から戦争が社会に与える不安定性を知ることができた。また、歴史を振り返るだけでなく、平和の実現には行動が不可欠であり、小さな努力にも世界を良くする力があると気づいた。さらに、異なる地域の参加者との交流を通じ、多様な意見に触れ、平和に関する自身の考えを表現する機会を得た。加えて、歴史的遺跡や音楽など、多様な形式に平和を伝える力があることを実感した。これらを踏まえ、平和に関する思いを発信する方法として、マーケティングや地域間の MOU 締結などの可能性を考えるに至った。

## 長崎チーム

**長崎県における原爆投下**

1945 年 8 月 9 日、第二次世界大戦末期に長崎に原爆が投下された。これにより長崎市の人口約 24 万人のうち約 7 万 4,000 人が死亡、約 7 万 5,000 人が負傷した。原爆は熱線、爆風、放射線を伴い、爆心地付近では数千度の高熱が発生し、1 キロ圏内の木造家屋は壊滅した。また、放射線の影響で被爆直後には嘔吐や脱毛、後には白内障や白血病、がんなどの被害が相次ぎ、現在にも続く健康被害が確認されている。被爆者は身体的被害に加え、経済的困窮や精神的苦痛、差別や偏見、生存者の罪悪感といった課題を抱えた。被爆者の人権が十分に守られないという社会課題は複雑かつ多面的であり、原爆の投下は今でも人々に影響をもたらし続けている。

**事業で学んだこと**

沖縄での学びは、安心して話せる場の重要性と平和の伝え方にある。価値観の異なる人々と毎日ディスカッションを重ねるなかで、安心できる環境と姿勢があったからこそ自由に発言でき、戦争や平和について多角的に考え、関心を深めることができたと思う。また、沖縄の現状を長崎に置き換えて考える機会も得た。戦闘機の音を実際に聞いて基地と密接する生活を肌で感じたことで、これが長崎だったらと想像することが平和の発信に重要だと考えた。私達たちがこの研修で得た学びを長崎に持ち帰り、多くの人と共有し、ともに考えを深めていきたい。

## ベトナムチーム

**ベトナム戦争**

ベトナム戦争は、アメリカが社会主義の拡大を防ぐために介入した戦争である。ベトナムは北緯 17 度線を境に分断され、北側はベトナム民主共和国、南側はベトナム共和国となった。この戦争はベトナムだけでなく、アメリカにも深刻な被害をもたらした。戦争による死者は、ベトナム人兵士と民間人で 200 万人以上、アメリカ兵は約 58,000 人にのぼる。戦争の中でも、最も深刻な被害をもたらし、現在も影響が続いているのは枯葉剤である。米軍は 1961 年から 10 年間にわたり約 7,200 万リットルの枯葉剤を散布し、その中には少なくとも 170 キロのダイオキシンが含まれていた。これにより、2 世・3 世にわたる障害、遺伝疾患、がんなどの被害が続いている。

**事業で学んだこと**

今回参加して、各国の歴史や沖縄戦についてはもちろんのこと、沖縄の文化や伝統、そして効果的な学習プログラムの企画についても知見を得ることができた。プログラム中にはゲームや講義、視察、交流会などが提供され、各国の参加者と友情を深めることができ、ベトナムで企画する平和に関するイベントの運営にも活かせると感じた。また、国のために犠牲になった英雄のことを忘れず、再び惨劇が起こらないよう、他国の文化を尊重しあい、共に美しい世界を作りたいと考えるようになった。私たち若者には、平和を守る義務があると思う。

## カンボジアチーム

**カンボジア大虐殺**

クメール・ルージュは、1975 年 4 月 17 日から 1979 年 1 月 7 日までカンボジアを支配した共産主義運動のグループである。この時代、人々は自由な居住や財産の所有、家族の形成を禁じられ、毎日 12 時間以上の労働を強制されるなど、人権は完全に剥奪された。クメール・ルージュは 196 の収容所、388 の処刑場、19,653 の集団墓地を含む監獄システムを設置し、投獄や処刑を繰り返した。その結果、わずか 3 年 8 ヶ月と 20 日間で、カンボジア総人口 700 万人のうち 170 万～ 200 万人が命を落とした。政権崩壊後も、カンボジアの人々は財産や家族の喪失に苦しみ続けている。特に、国の再建に不可欠な人材育成の場面では、これらの影響が今なお大きな課題である。

**事業で学んだこと**

沖縄では、各国の戦争や出来事の歴史を深く掘り下げ、このような事件が引き起こされた原因とその被害を学ぶことができた。このプログラムに参加しなければ、私たちが互いの苦しみの大きさを知る機会はなかった。今後の平和発信について、私たちが重要だと考えているのは、体験者と対話する場の設定、史跡見学等を通じた直接的発信、芸術や音楽などのパフォーマンスを通じた間接的発信、そして国内外での平和教育プログラムの実施と交流機会の提供である。

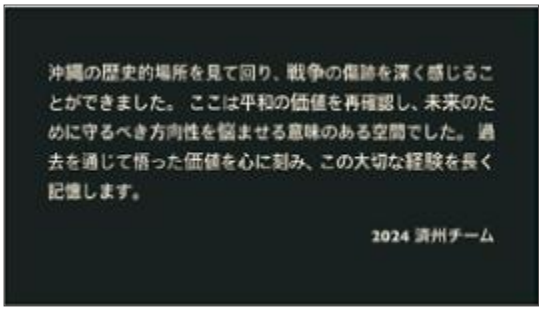
## 韓国チーム

### 済州島 4.3 事件

日本の第二次世界大戦降伏後、朝鮮半島は南北に分断され、米軍とソ連の統治下に置かれた。この分断は、統一国家を目指す左翼勢力と、独立を目指す右翼勢力の深刻な対立を生み、済州島もその影響を受けた。済州島では失業や伝染病が深刻化し、米軍政府の食料過剰徴収や親日派の警察や公務員の再雇用が住民の不満を高めた。1947 年 3 月、左翼勢力による非暴力の平和デモが米軍と警察に過剰鎮圧され、民間人が死亡したことで左右対立が激化した。1948 年 4 月、左翼勢力が警察支所を襲撃し済州島 4.3 事件が発生した。米軍と韓国政府の弾圧で島民の約 1 割にあたる 3 万人が殺害され、多くの家屋が焼失した。結局、この衝突の収束には 7 年がかかった。

### 事業で学んだこと

私たちの歴史は絡まり合っていることを学んだ。沖縄に来る前は関心を持っていなかったであろう歴史や戦争について調べ、もっと関心を寄せたいと思う。戦争は過去の話だと考えていたが、沖縄に来てそうではないことを実感し、済州の 4.3 事件にも今だに済州島に影響を与えている側面があるのではと疑問を持った。戦争という悲劇的な国家暴力は人によってもたらされるということ、そして平和のための実践を積み重ねていくのは、この場にいる私達全員であることを伝えたい。




## 沖縄チーム

### 沖縄戦

沖縄戦は、太平洋戦争末期の 1945 年 3 月から 9 月にかけて、沖縄本島を中心に展開された日米間の激戦である。この戦争では、14 歳から 19 歳の沖縄の若者たちが「学徒隊」として動員され、多くが命を落とした。戦地に赴く前、彼らは家族への思いや国のために命を捧げる覚悟を遺書に綴っていた。当時の教育には軍国主義的な価値観が色濃く反映されており、その影響は学徒たちの遺書にも見て取れる。沖縄県内には、戦争で犠牲となったこのような学徒隊や関係者を弔うための慰霊碑が多く建立されており、彼らの記憶を今に伝えている。

### 事業で学んだこと

印象的だったのは、沖縄戦の体験者が減少する中、今後は人からモノへと継承の形が変わっていくという視点である。現在、第 32 軍司令部壕跡の公開に向けた取り組みが進められており、このような遺構が今後ますます沖縄戦の記憶を伝える重要な存在になると考えた。また、このプログラムを通じて、沖縄が受けた被害だけでなく、日本の加害の歴史にも目を向ける必要性を強く感じた。植民地支配など、日本が他国とどのように関わってきたかを学ぶことは、平和を考える上で欠かせないと実感した。これらを踏まえ、私たちは、平和を築くには歴史を後世に伝える「縦の継承」に加え、国を超えて対話する「横の継承」が必要であると考える。他国の歴史や価値観を共有し、共通の平和論を模索することで、平和の実現へとつながるのではないだろうか。

## 第２部　パネルディスカッション｜揺さぶれ！無関心（概要）

モデレーター ( 新垣 誠 沖縄キリスト教学院大学 教授)

皆さんの地域で起きたつらい歴史や事件は、完全に終わったことだと言えますか？それとも、形を変えた何かしらの痛みが、今でも残っていると思いますか？みなさんの考えをお聞かせください。

広島チーム

先の発表にも取り上げた被爆樹木や被爆体験証言などが、現在も残っている被爆者の方々の痛みの形だと思います。これらには継承や保存費用の面で課題があるので、私たちとしてはまだ終わっていない、かつ、一つの負の遺産の歴史が残されたと考えています。

台湾チーム

事件は終わりましたが、被害者の方の痛みはまだ癒されていないと思います。被害者の方には十分な保障がされておらず、政府の取り組む移行期正義はまだ消極的かと考えています。

長崎チーム

被爆の痛みはまだ続いていると思います。被爆者が直面した問題には、身体的な被害だけでなく、経済的な困窮、正しい情報が伝わらないことなどによる差別など、精神的な苦痛も含まれます。このように被爆者が抱える社会的な問題は複雑かつ多面的で、その影響は今にも続いていると思います。

ベトナムチーム

ベトナムに戦後も残る痛みとして、枯葉剤の存在が挙げられると思います。被害者の方は長い間苦しんでおり、それを見ると平和を守りたいと感じます。

韓国チーム

2000 年 1 月に済州 4.3 特別法が制定され、現在はこの法律に従って犠牲者の名誉を回復すると共に、財政的な保障が行われているところです。しかし、犠牲者に対する差別問題があったり、この事件の公式な名称が未定だったりします。暫定的には「4.3 事件」とされていますが、この事件を「虐殺」や「運動」といった言葉で定義するべきか、まだ確定していません。

**カンボジアチーム**

カンボジアの戦争は、形としては終わっているかもしれませんが、戦争の影響が恐怖というかたちで強く残っていると思います。私の祖父母にも話を聞いたことがありますが、戦争の話を思い出してとても苦しんでいる姿を見ました。言葉にできないぐらいの恐怖というのが、生存者の中にある痛みと言えると思います。

**沖縄チーム**

カンボジアチームの意見と関連して、私も沖縄戦の生存者の方が涙ながらに語る姿を見たことがあります。戦争が終わって生き残りはしたけど、未だに戦争について語れないという点で、人々には深い傷が残っています。また、沖縄には今も基地が残っていて、もしそれがなければ起こらなかったかもしれない住民の被害があるので、この点においても戦争がまだ終わっていないといえるかと思います。

**モデレーター**

ありがとうございます。今回のテーマは「無関心」です。マザー・テレサは「愛の反対は無関心である」という言葉を残しました。つまり、無関心を揺さぶるためには、愛の行為が必要だと言えるのではないでしょうか。では、それはどんな行為なのでしょうか。みなさんの考えをお聞かせください。

**広島チーム**

広島の被爆者の方々はつらい思いをしながらも、その体験を語り継いでくださっています。次の世代が過ちをおかさないための警告も、愛だと思います。

**台湾チーム**

政府の行動に着目するということだと思います。2.28 事件は政府による市民への暴力がきっかけですので、それを避けるために選挙に行ったり、政府の動向に注目するということが考えられると思います。

**長崎チーム**

傷を癒すという点で、相手の心の傷に共感することが大事だと思います。そのためには相手との共通点を見つけたり、自分ごととして捉えたりする態度が必要だと思います。

**ベトナムチーム**

未来に向かうことだと思います。特に、さまざまな国と交流したりその文化を理解したりすることが、痛みに共感するという愛情につながり、敵対する存在を減らせるのではと思います。

**韓国チーム**

愛の定義は多様だと思いますが、共通点はつながりだと思います。さまざまな立場から 4.3 事件を経験した人と繋がろうとすること、彼らの人生を想像することなどだと思います。

**沖縄チーム**

他者の痛みを他者の痛みのまま理解するのも愛ではないかと思います。例えば、長崎で起きたことを沖縄での出来事と捉えて自分ごとにするのではなく、日本というくくりで捉えるということです。僕はこれまであまり他の地域とのつながりについて理解していなかったのですが、日本の加害の歴史という観点に基づくと自分ごととして腑に落ちたので、愛についてそういう見方もできるかなと思います。

**モデレーター**

ありがとうございます。今回沖縄チームが、これからは日本の加害者としての責任、そして参加している国々との連携から平和を考える、という旨の提案をしてくれました。実際ここに集まった友人達と、この先どのようにつながっていきたいですか？

**沖縄チーム**

今回参加して、互いの考えに対する相違点も共通点も感じながら、みんなと友達になることができたと思っています。ここで出会った友達がいる地域で何か起きた場合、気にかけるし、傷つけたくないと思うようになりました。実際にその地域に訪れたり、情報を集めたりすることで、このつながりを持ち続けられると思います。

**広島チーム**

今回の機会で、いろいろな地域の方と仲良くなれました。この関係を続けていけるように、より深い話ができるような環境づくりなどに取り組みたいです。

**台湾チーム**

個人的なつながりと国際的なつながりを大事にしたいです。個人でできることとしては、戦争や社会的な被害を受けた方々に関心を寄せ、彼らの声に耳を傾け、自ら行動することです。国際的なつながりについては、さまざまな国の歴史的な出来事や平和への取組について学び、相互理解と交流を深めていくことだと思います。これらのつながりにより、互いを緊密に結びつけることができると思います。

**長崎チーム**

交流を通していろんな国の人たちと仲良くなれたし、たくさんの共通点も見つけられたので、もっと他の国の歴史を知っていきたいと思います。ここに集まっている国々の歴史はどこかで交わり、絡み合っているということを学んだので、それぞれの国の歴史について、加害者、被害者、あるいは第三者という観点で学んでいきたいと思います。

ベトナムチーム

私たちが話す言葉は違いますが、今回の交流でとても楽しい時間を過ごすことができました。ここでできた新しい友達と、私たちも将来また喜んでつながっていきたいと考えています。

韓国チーム

今の若い世代は SNS を大いに活用していますので、ここで出会った私たちは、離れていても、互いにどう過ごしているか知ることができます。また、他の国で何かいいことや悪いことがあればすぐに連絡を取ることもできます。これが互いの国と繋がるということのひとつであると思いますし、このような方法でコミュニケーションを続けていくことが大切だと思います。

カンボジアチーム

さまざまな国や地域から集まった私たちがここで得たつながりを維持していくことは、とても大切なことだと思います。今後は SNS などのプラットフォームを用いてこのつながりを保つこともできるでしょう。また、今回の研修中に、プログラムの卒業生のみなさんと私たちとでオンラインで交流する機会もありました。このような交流の機会を用いて継続するのも、互いに繋がる重要な方法のひとつだと考えています。

沖縄チーム

沖縄チームは交流を通して、横のつながりの重要性について考えました。横方向に繋がることで、マイノリティだった痛み、たとえば沖縄の基地問題などを、互いに理解し、マジョリティの痛みに変えることができると考えました。みんなで平和について考え、目指すことが、沖縄戦の体験者の方々、県民、そして次世代を生きる人への愛でもあると思います。そのためには、よりよい相互理解を目指し、この事業を沖縄だけでなく他の 6 つの地域を回って開催するのもいいと思います。

モデレーター

みなさんありがとうございます。今回のみなさんの意見には、痛みを自分ごととして捉えるという観点が共通していました。歴史の継承も重要ですが、今痛みを感じている人の存在に目を向け、どう寄り添うのかということも同様に重要なテーマであると思います。このような歴史や現実に関心を寄せるというのは、必ずしも楽しいことではないのかもしれません。それでもやり続けるのは、暗い歴史を癒し、共に共有した先に、希望が見えるからではないでしょうか。

沖縄の「ちむぐりさ」という言葉は、他者の痛みを想像することで感じる痛みを表現しています。みなさんが絆や友情を大切にして、誰かの悲しみやつらさなどを感じ取り、ちむぐりさのような思いをして、互いを癒したその先にある希望が、明日のアジアなのではないでしょうか。みなさん今後も仲良くしてください。お疲れ様でした。

## 3 成果報告会　来場者アンケート結果

### 年齢別構成

◆来場者：30 名（アンケート回収数 22）

| 10 代 | 20 代 | 30 代 | 40 代 | 50 代 | 60 代 |
|---|---|---|---|---|---|
| 3 名 | 5 名 | 1 名 | 6 名 | 5 名 | 2 名 |

### 印象に残ったこと（一部抜粋）

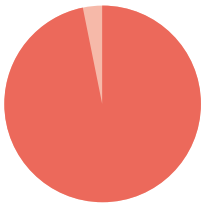
- 沖縄チームの発表がすごく印象に残った。7 つのチームが集まり学びを深めたからこそ生まれた発表だと感じました。
- 沖縄チームの発表の中で、各国や地域によって平和の捉え方や作り方が異なっていることを相互に認識した上でどのように世界で平和な社会を作り出していくのかを考えていくこと、連携をもとにした平和の作り方の重要性の提案が印象に残りました。
- 「愛の行いにも予算の裏付けが必要」という言葉が印象に残りました。沖縄県の方々よろしくお願いいたします。
- 沖縄チームが「私たちは加害者でもある」と発表したことはすごく良かったと思います。
- 自地域での戦争事件、沖縄戦や沖縄での学びから、これから平和を作っていくためにどうすれば良いのか述べられていたところが印象に残りました。
- 「無関心を揺さぶるために…」というテーマがとても印象に残りました。
- ベトナムチームの発表では愛国心というワードがたくさん出てきて興味がわきました。
- 若者たちの熱意と積極的な発言が印象に残りました。
- 戦争の終わり方で平和の認識が違うということが印象に残りました。

### 感想（一部抜粋）

- アジア地域の若者が自国の出来事、平和についてどう思っているのか聞くことができて非常に面白かったです。
- 各国各地域の学生の皆さんが平和について様々な視点で考え、交流をすることで、平和を維持していこうという思いを感じることができました。
- 短い期間の中で、濃い一日一日を過ごし、戦争の実相を学び、互いに交流しながら平和への思いと継承の在り方について考えたことが伝わりました。
- 各国地域の若者たちの素直な声が聞けてとても良かったです。
- 改めて、この 7 地域の交流が、とくにこの中で参加するベトナムチームの立ち位置が非常に大きな意味を持っているなと感じました。自分たちの当たり前が揺れ動きながらもその上で異なるけれどもどう乗り越えていくことができるか、この挑戦が平和へつながり、広がっていくのだと思いました。
- パネルディスカッションで互いの国・地域の考えを多角的に深堀りしていて良かったです。
- 平和交流からその国や地域について理解を深めたり新たな一面を発見できるのも魅力だと思いました。
- 7 か国地域の学生が戦争や平和を深め語り合うことの意味は大きいと思います。
- 海外の人と平和について交流することが、平和を作るうえでとても大切だと思うので、大学生だけではなく、高校生にもこのような機会がもっと欲しいです。
- 若者だけでなく、幅広い世代も交流ができる機会があればいいなと思います。
- せっかくの取組みなので、各国の報告を沖縄の新聞に載せたらいいのではないかと思う。
- 今回の発表を、英語や各国の言語での翻訳を付けて発信（アーカイブ）してはどうかと思いました。

# 1 アンケート結果

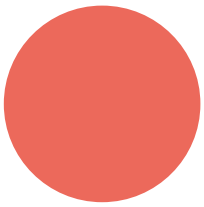
### プログラム全体の満足度



**97%**

「とても満足」「満足」と
回答した参加者

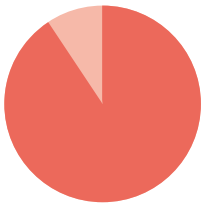
### 海外・県外学生との交流に関する満足度



**100%**

「とても満足」「満足」と
回答した参加者

### スケジュール・運営に関する満足度



**94%**

「とても満足」「満足」と
回答した参加者

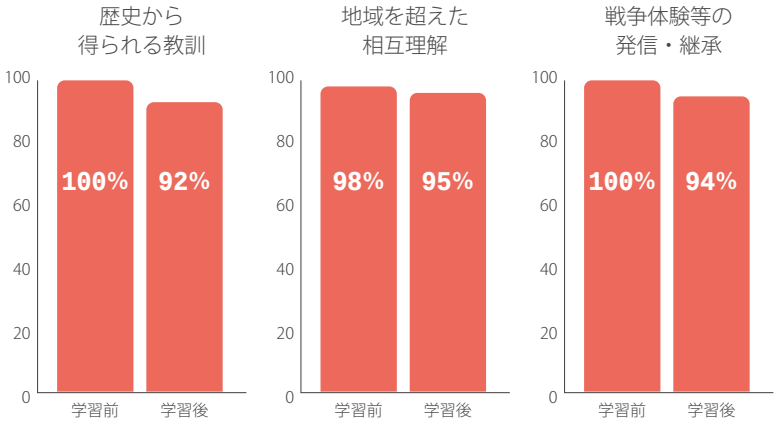
### 沖縄戦や他国の歴史に関する総合的な理解度

「とてもよく理解できた」「よく理解できた」
と回答した参加者

### 平和構築に関する意識の変化

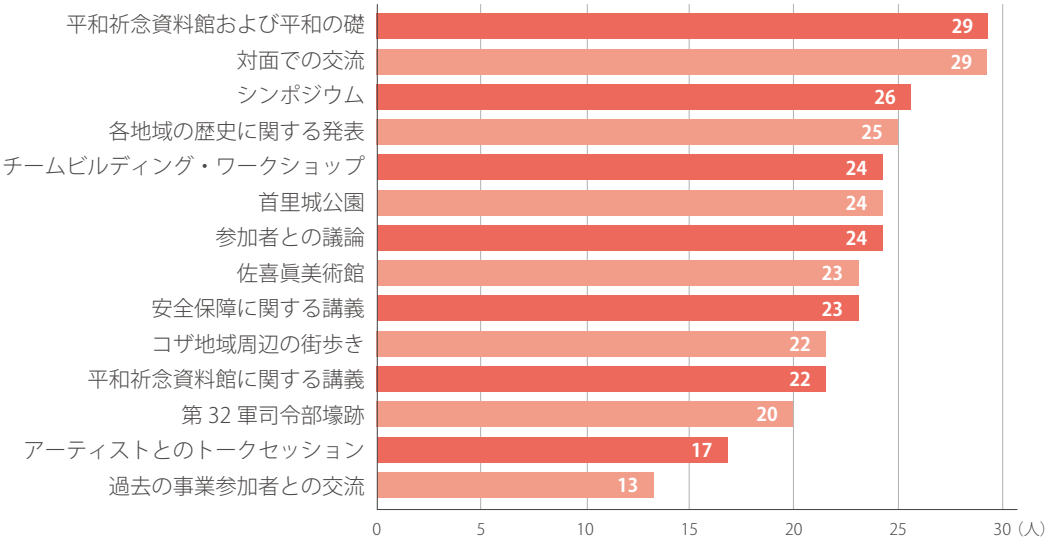
「とても高まった」「高まった」と
回答した参加者

### プログラム実施前後の興味・関心度の変化




「とても関心がある」「関心がある」と回答した参加者

### 特に満足度の高かったと感じるプログラム　内容別投票数（複数回答可）



## 本プログラムを終えての感想

中学・高校の授業で一通り他地域の歴史に触れてきたつもりでしたが、話題にされにくい戦後の問題や今の若者がどのように歴史を捉えているかについて、あらためて感じることが出来ました。国内でもまだまだ知らないことが多くあったため、それを学ぶだけでなく自分なりに子どもたちへどう伝えられるかという方法論を考え直したいです。（広島）

研修に参加する前と後で考え方が大きく変化したと感じました。特に、平和を形作るための教訓がこんなにも違うことや、日々の習慣も違うことが興味深く感じました。（沖縄）

沖縄には被害の歴史と日本人としての加害の歴史の２つの面があることを知ることができました。そこから平和の礎や慰霊碑を見ると、果たして私たちは「平和を作ろう！」「手を取り合おう」と謝罪する前に言ってしまっているのでは？と疑問を自分自身に投げかけることができました。また、他のチームと話していると、軍隊の必要性、国民性、戦争の勝敗といったところで違いがあり、平和の作り方が大きく異なることがわかりました。だからこそ、対話をしながらなぜそう思うのか？と理由や背景を知りたいと思うようになりました。まだ話し合えてないトピックもありますが、多くの議論で少し彼らと向きが会えた気がします。（沖縄）

今までの平和教育を受けて、戦争の悲惨さを知り、戦争の歴史を知ることが平和を作るための唯一の方法だとしか考えていなかった。しかし、平和について本当に考えてはいなかったのだと実感した。沖縄、日本、各国の同世代の意見を聞き、疑問に思うことや考えさせられることばかりで驚いた。平和の作り方や捉え方、発信の仕方も三者三様なので、横の継承の重要性、他地域の歴史、考え方を否定をせず肯定し、他者の状況を知り、話し合いの中で折り合いをつけることが大切だと感じた。（沖縄）

ニュースで見たり聞いたりするのとは違って、現地の人の言葉で、直接会って、基地を見て感じたからこそ、基地問題についての問題意識が高まった。もっと調べて学びを深めていきたい。（広島）

あっという間だったというのが、率直な感想です。しかし、このあっという間の中は１日１日が濃い学習ばかりで、かけがえのない日々でした。（広島）

言語の壁を越える鍵は「伝えたい、知りたい」と思うことであると学びました。（長崎）

沖縄戦や米軍基地について直接学ぶ貴重な機会でした。学校で詳しく学ぶことが少ないテーマであり、事前に調べた学びとは異なる生の情報に触れたことは非常に新鮮で貴重でした。また、自分の地域については深く理解している一方で、他地域の歴史や課題に対して少し無関心だったことに気づき、それが関心へと変わる瞬間を多く経験しました。（長崎）

自分と異なる価値観や背景を持つ人々との対話を通じて、新たな視点や考え方を得ることができました。特に、新垣先生とのディスカッションやシンポジウムでは、深い対話の重要性を実感し、意見交換を重ねることの楽しさと重要性を痛感しました。意見を自由に交換できる環境を整え、新たな平和のあり方を共に探求し、共通の目標を実現するために協働する大切さを学びました。（長崎）

特に印象が深かったことは、他の県の方や他国の人と交流することができたということです。１週間一緒にいることで壁をだんだんと失くすことができ、少しの単語や身振り手振りで相手に感情を伝えることができました。また、言葉や国が違っても私が落ち込んでいるとき慰めてくれたり、笑いあったり、恋ばなをしたりすることは一緒なんだなと感じました。（長崎）

この数日間の行程を通じて、米軍の存在が単なる国防の問題にとどまらず、沖縄の人々の生活に深刻な影響を与えていること、さらには多くの事故を引き起こしていることに気づきました。これをきっかけに、もし世界が平和であれば、こんなにも多くの問題は生まれないのではないかと感じました。では、平和をどうやって広めていけばよいのか。これからは、自分も平和の実現に少しでも力を尽くしたいと思います。（台湾）

平和を様々な形式で発信できることを実感しました。一番印象深かったのは佐喜眞美術館で展示されている沖縄戦の図でした。絵によって戦争の残酷さが表現されており、私の心に強く刻まれました。その迫力は一生忘れられないでしょう。（台湾）

ほかの国の友達と触れ合う機会が多くて仲良くなることができましたので、すごく嬉しかったです。そして各国の被害の発表を通じて平和って何だろうと考える機会となりました。（韓国）

沖縄に来る前、周りの人々から本当にいいプログラムで、人生が変わるかもしれないという言葉を聞きましたが、その時は理解ができませんでした。1週間で人生が変わるわけないでしょうと思いましたが、プログラムが終わった今、特別だったその時に戻りたくてたまらないです。このプログラムを通じて、「世界は絡み合ってるんだ」と感じました。（韓国）

沖縄で各地域の事件について学び、また直接海外の若者の考えを聞くことができた大切な時間でした。 沖縄に来る前、本とインターネットで勉強した内容とはまた違った視点で学ぶことができました。 そして、済州 4.3 事件をはじめとする各地域の事件が、今もなおその影響において「まだ終わっていない」ということを改めて感じました。（韓国）

このプログラムに参加することで、今まで漠然としか考えていなかった、あまり関心を持っていなかった「戦争」、「平和」、「歴史」、「疎外」などの言葉が具体化される瞬間を経験しました。（韓国）

このプログラムに参加する前、私は歴史や芸術に興味がなかったのですが、参加してから、このテーマを本当に印象深く感じました。美術館を訪問して、沖縄戦はすごく残酷な戦争だとわかりました。歴史は変わらないですが、歴史の事実は必ず忘れないようにします。各国の学生と交流して、友情を深めることができました。楽しかったです。ありがとうございます。（ベトナム）

プログラムを通じて、平和を保ち、守ることの重要性についての認識を高めることができました。また、戦争についての別の視点や、戦争がもたらす悲惨さについても学びました。さらに、プログラムの参加者の皆さんの協調性と熱意に非常に感銘を受け、すぐに溶け込むことができました。（ベトナム）

このプログラムでは、平和が地域、国家、そして国際レベルでの協力によって成り立つ共同の努力であるという考えを学びました。（カンボジア）

このプログラムを終えた後、私は第二次世界大戦中の太平洋戦争の歴史を知ることができました。また、博物館を訪れることで、戦争が多くの人々やあらゆるものに与えた影響について学びました。 さらに、広島、長崎、韓国、台湾、沖縄、そしてベトナムを含む各地域の歴史を知ることができました。 加えて、異なる国や言語を持つ参加者たちとも、多くの思い出を作ることができました。（カンボジア）

このプログラムに参加して、他国の歴史について学び、互いに尊重し合いながらチームで協力し、美術館や博物館を訪問することができ、とても素晴らしい体験ができました。（カンボジア）

## 本プログラムを通じて感じた、平和に関するあなたの考え

私にとっての平和は、何もしなければ戦争に進んでいく世の中をつなぎ止めるための大事なくさびのような物だと感じました。平和は、何も行動せず、考える事をやめてしまえば、壊れるようなもの。そのため、一つ一つの自分の行動をやめないことが平和構築の一歩だと感じました。（沖縄）

平和は地域を超えて国を超えて繋がり、共に作り上げていくものだと考えます。（沖縄）

これが平和だと一言に言うことは、本当に難しいと思いました。加害と被害の歴史があり、それを無かったことにするのは絶対に無理ですが、同じ過ちを犯さないために他地域のこと、そこに住む人のことを実際に知ること、そして対話をして理解していくことが平和を創るひとつの方法になると思います。ただ、それでも脆い部分があるので、どの世代も考え続ける必要があると思いました。また、本当に今の環境が平和なのか考えることも必要だと思いました。（沖縄）

平和とは対話ではないかと思いました。様々な意見があり、到底受け入れることもできないこともあると思います。それでも他人の話を聞き理解して行くのが平和なのではないかと思いました。（沖縄）

平和という目標を達成しようとする際に１番大切なことは、平和へのプロセスがそれぞれ異なるということを理解することだと感じました。（広島）

私は「世界中に友達を作れば戦争は起きない」という言葉を信じている。今回のプログラムで各地域と関わって仲良くなり、国を超えた繋がりができた。みんなも言っていた通り、友達がいる国とは戦争したいなんて思わない。平和をつくることは、語り継いだり、発信したり、学ぶことも大事だけど、それと同じくらい国際交流も大事なのではないかと思った。（広島）

今回のプログラムを通して、人や国によってどんな状態を平和と定義するかは様々で、その平和を手に入れるための過程も様々であることを学び、「平和」という言葉の複雑さと奥深さを改めて感じた。そのため、真の意味で「平和」について考えていくのであれば、多角的な視点から学び、考えることが大切であると考えた。（広島）

完璧な平和を実現することは難しいというのが元々の自論でしたが、平和のために個々が取り組むことは難しくないのだと感じました。個々の取り組みが今回 35 名という大人数に繋がったように、世界全体の恒久の平和のために、今回の学びを子どもたちへ伝えていきたいです。（広島）

私にとって平和とは、人々が互いに尊重し合い、協力して共に暮らすことができる状態です。争いや暴力のない世界では、お互いの違いを理解し、受け入れる姿勢が重要です。平和を実現するためには、教育、対話、コミュニケーション、そして共感や優しさが欠かせないと考えます。（長崎）

このプログラムを通して、平和とは「日常にある小さな幸せ」だと思いました。そして、この事業が平和そのものだと思いました。研修中、参加したメンバーたちと楽しく食事をし、共に学び、話し合いを重ねました。私は１週間という短い期間でしたが、このプログラムのメンバーたちと強い信頼を築くことができたと思っています。そして私の心は幸せという感情で溢れていました。このように日常の中の小さな幸せが集まることで、「平和」という概念が出来上がると思いました。私が考える平和を実現するためには、平和が壊された戦争について「発信」することが重要です。そのために私は、instagram での発信や修学旅行生、外国人観光客に対する平和公園周辺のガイドに力を入れていきます。（長崎）

私はもともと平和とは理想的で抽象的な概念だと思っていましたが、今回のプログラムを通じて、平和は行動によって実現できるものだと気づきました。（台湾）

今回の事業を通じて、私は「平和は理想的なものであると同時に、現実的な課題でもある」と認識するようになりました。これまで、原爆投下による被爆者への差別や心身・精神的苦痛が未だに続いていることを知りながらも、戦争は過去の出来事のように感じており、平和はすぐに手に届きそうな理想だと捉えている自分がいました。しかし、沖縄戦のガマの再現や資料を見て強い悲しみを感じ、米軍基地から聞こえる飛行機の音を実際に体験する中で、戦争の痛みが今もなお残っていることを実感しました。また、海外のチームの発表を聞く中で、戦争の経験が依然として過去の出来事ではなく、つい最近のように感じられることを知り、「戦争が本当に終わったと言い切れるのか？」という疑問を抱くようになりました。戦争の痛みは癒されることなく今も続いており、それを痛感しました。（長崎）

平和のために何すべきかと考え、こんな私なんて何もできないだろうと思う人が多いと思います。しかし、平和の形はそれぞれです。自分自身で平和を定義し、自分から積極的に考え続け、平和を意識してもらうことは全ての第一歩でしょう。平和へのウムイについて、それぞれあります。いろんな形で私たちの側にあります。触れて、理解して、そして伝えましょう！（台湾）

小さなことから積み重ね、自分自身で平和を定義していくアプローチが重要だと思う。各地域によって平和の程度には違いがあるけど、人権を守ることは人類の責任だと考える。（台湾）

今回のプログラムに参加しながら平和をより直接的で近いことだと思うようになりました。平和とは何だろう？質問して話し合うことから始めたいと思います。 そして平和のために私が今いるところで何を実践できるか悩み、実践のために努力しようと思います。（韓国）

今回のプログラムに参加して、平和は静的な状態ではなく、動的なプロセスであり、それぞれが考える「平和」のために、これから私たちが行うすべての実践が積み重なっていく過程だと思うようになりました。（韓国）

このプログラムを通じて、平和を実現するためには、若者から高齢者まで、すべての人が戦争に関心を持ち、配慮することが必要だと感じました。（カンボジア）

戦争を始めるのは簡単ですが、終わらせるのは難しいものです。第二次世界大戦や冷戦が終わったとしても、その影響は現在に至るまで続いています。たとえば、戦争の被害者や戦争の傷跡、特に沖縄にあるアメリカの基地などです。これらは、世界がまだ十分な安全を確保できていないことを示しています。私たちは平和が永遠に守られることを願っています。戦争を起こすのも人間であり、それを終わらせるのもまた人間です。（カンボジア）

このプログラムを通じて、平和に対する理解が大きく広がりました。平和とは単に戦争がない状態ではなく、理解や協力があり、相互尊重を育み、不公正を解消し、誰もが安心して暮らせる環境を作り上げる状態であることを学びました。このプログラムは、私に平和構築の努力に貢献する意欲を与え、世界に良い影響を与える方法を模索するきっかけを与えてくれました。（カンボジア）

平和とは、人々が互いに尊重し合い、協力し合い、そして共に生きることを意味します。平和を実現するためには、私たち一人ひとりが、平和への意識を持ち、平和のために行動することが重要です。例えば、日々の生活の中で、相手への思いやりを忘れず、異なる意見を持つ人とも対話しようと努めることができます。また、平和に関する知識を深め、平和活動に参加することも、平和実現への貢献となります。（ベトナム）

平和は単に国を守り、戦争がないことだけではなく、人々を守り、世界中で愛を築き、結びつけることだと思います。平和は、互いに理解し、気遣い、愛し合うことから生れると考えます。（ベトナム）

平和は戦いがないという意味だけでなく、相互理解をし、つながりを作ることだと思います。相互理解があってこそ、平和が形づくられるのではないでしょうか。（ベトナム）